

for Better Sound Creation

よりよき音色を求めて

日本を代表するドラマー、小林陽一氏には、勝手ながら「アート・レイキーの後継者」という印象がある。小林氏もまたレイキー御大同様、ホーンセクションを育てる名手として知られているからだ。小林氏が率いる「グッドフェローズ」などのバンド&コンボで、いなせな喇叭を聴かせる松島啓之(けいじ)氏は、ある取材がきっかけでBSCの魅力に気付いた

ジャズマンが気に入った「シンフォニー」

若き日にパークリー音楽大学に学び、本場の空気の中で自らの喇叭の腕を鍛えてきた男マツシマの喇叭からは、ともすれば忘れがちな「粹でいなせなカッコよさ」がある。リー・モーガンを想わせる、メロディセンスのよさが魅力だ。そんな松島氏は、ある雑誌の新製品コーナー(本誌における「旅達の愛手夢(Item)」ですね)でBSCに出会った。「もちろん予備知識なんてありませんでした。最初は『オールラウンド』を吹いてみたのですが、音のツボがはっきりしていて、しかもあまり固くならず柔らかい輪郭をもっているところに感心しましたね」

その基本的な性格は、ハンドメイドである「シンフォニー」でもきちんと感じ取れる、と松島氏は語る。そもそもBSCラインアップの中では最初に開発されたのが「シンフォニー」で、それをベースに低価格化をはかったのが「ミレニアム」、そして「シンフォニー」に抵抗感やきらびやかさが欲しい、という要望に応じて開発されたのが「オールラウンド」という、開発の経緯がある。501Gは別格として、BSCの音楽的な遺伝子の源流



取材は東京・新大久保「山野楽器ウインドケル」にて。「オールラウンド」と「シンフォニー」を吹きくらべていただいた

はこの「シンフォニー」にある、といってもいい。しかも、ほとんど手作業で丁寧に組み上げられたこのモデルと、一部に機械化が取り入れられたモデルがほとんど見かけ上は区別がつかない。普通ならいかにもハンドメイド、というような見かけにして価格差を納得させる、という営業的な意図が見えかくれしてもいいところだが、このあたりにこそ造り手側の並々ならぬ情熱が感じられる。また、だからこそ多くの人に「手にしていきたい」「そばに置いておきたい」と感じさせる現代の名器になり得るのだろう。

「確かにそうですね…コレ、持っていてもいいなあ…。ともかくボクは最初に「オールラウンド」を吹いちゃったからその流れで話していきますが、「オールラウンド」よりもさらに磨きがかかっている、という印象ですね。

実にこなれた感じで、どこをどうしたらここまでこなれることができるのか不思議な(笑)感じですよ。見かけ上はまったく変わらないのに」

細かく言うと外見的には「オールラウンド」とはいささかの違いがあるのだが、大きなものではない。それよりも表現力の懐の深さに松島氏は驚いたのだ。本誌取材時に改めてたっぷり吹きくらべて頂いたのだが、「オールラウンド」と「シンフォニー」の大きな違いはハンドメイドであるかどうかという点ではないか、というのが松島氏の見解。「ハンドメイドでなければこの吹奏感というのは出ないのではないかな?ミドルレンジの周波数帯域がふくよかで、コンボからビッグバンドまでさまざまな編成の中で使ってみたいな、という気にさせてくれるモデルですね」

We are Brass Sound Cats !

音色が太くなったね、とほめられました



外見上はそっくりな「オールラウンド」(右)と「シンフォニー」
しかし音色は…



草野康弘氏(右)。左はBSCを紹介してくれた4年の先輩、作山氏



BSCの「シンフォニー」の音色を堪能できる「ジャズ」のライブ
は5月28日、赤坂「ビーフラット」にて!

BSCのラインアップの中では、松島氏の最も好みに合うモデルだという。

「名前が『シンフォニー』、というのがおかしいですよね、ボクが使うことを考えると(笑)。でも真剣に『買ってもいいかな?』と悩みつつあるところです」

そんなわけで、現在「試験飛行中」の松島&シンフォニーのコンビ。別掲のライブでは実際に我々もその音色を確かめることができる、という。ぜひジャズマンの奏でる「シンフォニー」の響きを体験してみたいもの。

慶應義塾大学の学生オーケストラは、「ワグネル・ソサイエティー・オーケストラ」(以下「ワグネル」)と呼ばれているが、同大学に付属している慶應義塾高等学校(高等科)の学生オーケストラの名称も同様に「ワグネル」である。今回ご紹介するのは、幼稚舎(いわゆる「小学校」に相当)以来の生え抜きの慶應ボーイ、草野康弘氏。この春に大学2年生となったばかりで、現在は「ワグネル」の庶務をつとめている。トランペット歴は幼稚舎4年生の頃からと言うから、すでにかなりのキャリアを誇るベテラン。ご本人は「まだまだですよ…」と顔を赤らめるが、1年生オケの恒例行事である夏合宿での「ニュルンベルクのマイスター・ジンガー前奏曲」披露では堂々と1番の有名なソロを吹きこなしという実力の持ち主だ。

「幼稚舎から吹奏楽だったんですが、高校に入ってオーケストラに入ってから音色について考えるようになりました」

優れたトランペット奏者には独特の「顔」があるというが、草野氏も例外ではない。素晴らしい顔と歯並びに恵まれている。幼稚舎の頃から奏法的な悩みを抱いたことはないというが、吹奏楽とオケでのトランペットの役割の違いには戸惑ったようだ。「オケでは作曲家や指揮者の要求に応えることに難しさを感じました。高校3年生の時にはチャイコフスキー5番の1番を吹いて、体力的にも大変だということを知りましたし…」

高校時代はまだそれでもよかったが、次第に音楽に目覚めてくるとどうしても楽器やマウスピースについて考えを深めていく。その過程でめぐりあったのがBSC「シンフォニー」だった。

「4年生の先輩がBSCの「シンフォニー(301)」を吹いていらして、ある時それをお借りして吹かせていただき、その吹き易さと音色に驚きました」

BSC「シンフォニー」を吹くとホールに音が響き渡る。そんな感覚がうれしかった。特にサントリ

ー・ホールで演奏したアイダ・シンフォニア(ヴェルディ自身が最初に書いた序曲で、一般的な「前奏曲」とは異なる)で吹いたところ、その威力にあらためて驚かされた、というのだ。「シンフォニー」の魅力が「シンフォニア」において発揮された、というわけだ。

「BSCを著名な方が吹いている、というのは知っていましたが、自分で吹いてみて初めてその理由が分かりました。これまでずっと深く太い音色が欲しくて、次第にマウスピースも大きい方に変えつつあったんです。ちょうどその狙いにこの「シンフォニー」はぴったりでした。先輩のBSCとこの「シンフォニー」は細かい部分のデザインが違うのですが、それらもみな音色に影響しているような気がしています。ポトムキャップや、ウォーターキーのフィッシュテール、ベルガードのデザインなど、他の楽器にはない個性的なところがいいですね」

慶應大学は現在、有名な三田と日吉の他に3つ、合計5つのキャンパスがある。草野氏が在籍している藤沢の総合政策学部は、同学の中では比較的新しい学部である。そこに学び、将来の夢を膨らませる草野氏だが、BSCを手にするによってより音楽の楽しさが体感できるようになった、と微笑む。

「多くの先輩方が築き上げてきた伝統の上に、「ワグネル」は昨年105周年を迎えることができました。その伝統を感じながら、新しい歴史を塗り上げていくことがボクたちの使命だと感じています」

氏が言う「ワグネル」の伝統とはすなわち、ドイツ音楽の正統的表現。

「ワグネル、ソサイエティー」という名前はドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナーに敬意を表して付けられた。ワーグナーが近代音楽史上で新しい挑戦をしたように、この団体が常に新しい挑戦をし、飛躍していくという意味でつけられたものなんです。ドイツで育ったBSCの「シンフォニー」モデルには、「ワグネル」が本質的に求めるドイツの音、みたくなものを感じます。ツボにはまった時の、ホールの奥深くまで届く圧倒的な音色には、我ながら感動しています。トランペットはさまざまなジャンルで活躍できる素晴らしい楽器ですから、表現したいジャンルによって細かい対応をしていくべきだ、と思っているんです」

この楽器に変えた時には、周囲もその変化を快く受け入れてくれた、というが、ご本人自身が誰よりも先に「シンフォニー」による音楽表現の奥深さに気付いたという。楽器を変えたことが、さらに音楽好きになるきっかけとなったようだ。

来年、草野氏は成人式を迎える。前途は洋々。将来の夢は予定通りの学問の道か、それともBSCにほだされて音楽の道に変わるか。いずれにしても、目一杯楽しんでいただきたいものである。